

旭川医科大学 回顧資料(3) 昭和50年度

第1回医大祭の開催

—メインテーマは「創設から創造へ」—

旭川医科大学は、医学部医学科のみの単科大学として昭和48(1973)年9月に開学し、翌10月から旭川市北門町の仮学舎において授業が開始された。そして翌昭和49年5月には、同市緑が丘の現在地に完成した講義実習棟で本格的な授業がスタートした。同年にはまた、体育館・福利厚生施設・中央機械室なども竣工し、諸施設が順調に整備されていった。附属病院の建設が着工されたのは同年3月であり、工事半ばの翌昭和50年4月には、附属病院創設準備室が設置されて活動を開始した。

学生も毎年、高倍率の志願者・受験者の中からほぼ100名ずつ、順調に選抜されていった。開学後3年間の志願者・受験者・合格者・入学者のデータは下表のとおりである。現在の医学科ではどの学年も女子学生が3割ちかくを占めているが、当時は1割未満と、きわめて少なかった。

志願者・受験者・合格者・入学者の道内・道外比率

	48年度	49年度	50年度
志願者数	1,685(92)	1,383(88)	1,476(118)
道内	755(48) 44.8%	817(65) 59.1%	1,021(87) 69.2%
道外	930(44) 55.2%	566(23) 40.9%	455(31) 30.8%
倍率	16.9	13.8	14.8
受験者数	1,620(85)	912(55)	995(79)
道内	743(45) 45.9%	587(43) 64.4%	714(59) 71.8%
道外	877(40) 54.1%	325(12) 35.6%	281(20) 28.2%
倍率	16.2	9.1	10.0
合格者数	104(5)	106(9)	105(9)
道内	47(1) 45.2%	79(7) 74.5%	81(9) 77.1%
道外	57(4) 54.8%	27(2) 25.5%	24(0) 22.9%
入学者数	100(5)	101(9)	100(9)
道内	46(1) 46.0%	75(7) 74.3%	76(9) 76.0%
道外	54(4) 54.0%	26(2) 25.7%	24(0) 24.0%
学生定員	100	100	100

()内は女子で内数 合格者数：繰り上げ合格者を含む

開学2年目の昭和49年7月には、学生の自治組織である学生会が発足した。翌50年4月には、教官・学生の親睦団体として学友会が発足した。そして、学生数が300名に達した同じ50年、学生にとって早くからの懸案であった大学祭が、いよいよ開催されるはこびとなった。主催は学生会、後援は学友会である。

学生会の執行委員会のもとに大学祭実行委員会が設置され、同年6月から準備にはいった。そして9月24日に前夜祭、25、26、27日にさまざまなイベント、28日に後夜祭という日程で、「医大祭」と命名して開催された。その目的として掲げられたのは、学生相互および教職員との親睦を図ること、そして、大学生活における多様な成果と現時点における医科大学としての機能をもって地域社会にコンタクトすることであった。

24日の前夜祭は会場を市街地に求め、常盤公園を借り切って行われた。樽酒の鏡開き、各種模擬店、バンド演奏などを、一般市民と共に深夜まで楽しんだようである。25日からはメイン会場を大学内とし、さまざまな企画が目白押しにつづいた。

医学講演会として「スモンと水俣病」および「クロム禍とその教訓 —社会医学的考察—」が開催された。前者の演者は新潟大学脳研究所の椿忠雄教授、後者は北海道大学医学部の渡辺真也助教授（いずれも当時）であった。これらは、当時の国民の多くが巻き込まれていたさまざまなかたちの公害を、如実に反映した企画であった。そのほか、作家を招いての文化講演

会「なぜ表現するのか」、学生有志による研究発表「癌について」「まさに驚異的とも言える生命現象の神秘」「6価クロム」、専任教官を交えての討論会などもあった。

むろん、娯楽もののイベントもいろいろ展開された。たとえば映画の上映である。まず、日活映画「八月の濡れた砂」(藤田敏八監督、村野武範・テレサ野田ら出演)。これは昭和46(1971)年の劇場公開作品で、当時の一般向け映画としては性愛描写がかなり露骨な作品として知られている。同じく、山田洋次監督の松竹映画「男はつらいよ 柴又慕情」(渥美清主演、マドンナは吉永小百合)も上演された。劇場公開は昭和47年で、寅さんシリーズ第9作である。ほかにチャップリン主演の喜劇も上演され、また、安部公房原作の喜劇「闖入者」が学生有志によって演じられたようである。

ほかに、古本市、ソフトボール大会(会場は医大グラウンド)、ダンスパーティー(会場はセントラルホテル)、各種サークル企画、模擬店などがあり、ストームを中心とする後夜祭(会場は医大グラウンド)で全日程を終了した。なお、以上のイベントはいずれも、当時の予告パンフレットに掲載されていたもので、これらが当日すべて、実際に実施されたかどうかは定かでない。

ところで、そのパンフレットであるが、B5判30ページほどのモノクロ印刷の冊子で、表紙の写真は当時建築途上にあった附属病院の鉄骨像であった。表紙上段に、大きくメインテーマ「創設から創造へ」が印字されている。市内の病医院や各種小売店の広告のページが半分以上を占める冊子ではあるが、大学祭を自分たちの手で創出するのだという、学生の情熱や意気込みや歓喜がひしひしと伝わってくる文章も、多数掲載されている。その中から、冒頭の「第1回医大祭実行委員会アピール『創設から創造へ』」と題する文章を全文紹介しよう。この文章は委員会メンバーの誰かが代表して書いたのか、それとも複数で知恵を出し合っただけなのか、残念ながらその辺は定かでない。なお、この医大祭は、翌年から開催時期を6月に変更し、今日に至っている。

第1回医大祭実行委員会アピール

「創設から創造へ」

私達の生活は日々の学生生活においては、その一部を顕すに過ぎない。私達は己の周囲の人々を余りに知らない。それを痛く知っているからこそ、私達は聞くのだ。私達の立つその傍から、互いに求め合う声が顫動となって伝播するのを。それは少しづつ私達の魂を揺さぶって来た。そして今、断ち切られていた私達の一人一人の発する顫動が次第に共鳴現象を起し、一つの小さな渦が生じた。

今、第一回医大祭を開催するにあたり、全学構成員に訴える。目まいのしそうな偶然の淵から、共に学ぶことになった私達である。けれども、語り合う言葉が互いの琴線に響き合う、そんな感動を持ったことはないか、それは一つの空間を共有する私達の特権ではないだろうか。騒然とした日常生活の時間の内から「大学祭」の時間を切り出し、埋もれかかったその特権を掘り起し、語り合いを梃子として、私達の力の不等式 $1 + 1 > 2$ を成立させようではないか。人の輪のラジカル反応を起そうではないか。

創設から創造へ —— 今まさに、主要な建築物が形を成さんとする時、聳える建設物を仰ぎ見ながら、私達は日々の営為の根底にあるものに、それを可能にする土壌に思いを回らす。私達がそこに根をもっていると実感できる共同体、私の汗が私だけの汗でない世界、真に創造的な空間、それをこの神楽岡の地に創造せんと希う。

建設途上の鉄骨の構築物の荒々しさと、逞しさを、そして内に脆弱さ、繊細さを秘めたシルエットは、私達に或感慨を持たらす。しかしその感慨は「創造」に対するものではなく、「創設」に対するそれであろう。しかし私達の日常は、着実な鈍音とは裏腹に、「創造」と一であるはずの「創設」からの疎外感に苛まれてはいないか、可能性を秘めるものに対する期待を、不確実性に対する恐れ、駆り立てられる者の苛立ちが取りまいてはいないか。

今まさに、主要な建築物が形を成さんとする時、「創設」の可能性と不確実性を諸刃の剣として、私達は「創造」の門の前に立つ。今こそ、「創造的な医科大学」を如何に創り出すことができるか！と全構成員に問いかけがなされている。私達のコンセンサスが求められている。それは日々の営為の修練の内こそ培われ確立するものである。一時の燃焼にその起源を求める者は軽卒の誇を免れない。熟慮と、たゆみない話し合いと、ねばり強い行動が要請されよう。医大祭をその長い道程のささやかな一里塚にしようではないか。

一般の参加者の皆さんへ!!

開校以来、丸二年経た医大ではありますが、皆さんにとっては、はるか忠別の彼岸の存在でしかなかったのではないのでしょうか。しかし建学の最主要目的として地域社会の保健と医療の質と量の向上を謳っているのですから、早晚私達は皆さんと関連を持つべく運命付けられていると言っても過言ではありません、そういう存在であるにもかかわらず、今日迄何ら大学として公に市民に開放された形での企画がなかったのは私達の怠慢であったと反省しています。今だに医科大学としては実のない状況ですが、未長い大学の歴史の今という時点を皆さんの前に示すことは、ありのままの大学を認識していただく一助になろうかと思えます。拙い催しではありますが、一端なりとも私達を、そして皆さんの大学としての旭医大の内側を、自らの眼で観ていただきたいと思います。

ちなみに、医大祭が始まったこの昭和50年といえば、金脈問題を追及されて前年12月に辞任した田中角栄に代わって三木武夫が首相の座に就いていた年である。3月には、それまで新大阪から岡山までの営業であった山陽新幹線が、博多まで全線開通した。4月の東京都知事選挙では、初挑戦した保守系の石原慎太郎候補(芥川賞作家)が3期目をめざす革新系的美濃部亮吉候補(経済学者)に大差で敗れた。7月には、黒澤明監督の映画「ゲルス・ウザーラ」がモスクワ映画祭で金賞を受賞した。

医学・医療関係の話題としては、8月に東京女子医科大学で日本初のX線コンピュータ断層撮影(CT)が開始されたこと、10月に東京で第29回世界医師会総会が開催され、武見太郎が新会長に就任したことが注目される。

日本と関係が深い海外の出来事を拾ってみよう。4月には、南ベトナム解放民族戦線(ベトコン)が首都サイゴンへ無血入城し、15年余りにわたったベトナム戦争が終結した。戦争中、アメリカ軍は、日本の提供する軍事基地を重要拠点として、北ベトナムへのいわゆる「北爆」を繰り返していたが、それが結局は徒労に終わったのであった。8月には、日本赤軍がクアラルンプールで米・スウェーデン両大使館を占拠し、過激派7人の釈放を日本政府に要求した。政府はその要求に屈し、拘置中の過激派を釈放するという前代未聞の超法規的措置を決定し実行した。これらの事実を前にして、日本は本当に「独立国」なのか、そして「法治国家」なのかと考えさせられた日本人も多かったのではないか。

なお、この記事の執筆にあたっては、前回同様、『旭川医科大学十年史』と『近代日本総合年表第3版』を参考にした。
(旭川医科大学 歴史 近藤 均)

(付記)

第1回医大祭パンフレットの現物は、昭和49年以来の本学スタッフである上口勇次郎教授(生物学)の御好意によって参照することができました。ここに記して深謝いたします。